

『翰林五鳳集』について——近世初期漢文学管見——(三)

On "Kanringohōsyū" (3)

蔭 木 英 雄

本論集の第四・五巻で、私は、近世初期の漢文学史を横目で瞥見しながら、『翰林五鳳集』(以下『五鳳集』と略記)の成立事情を考え、推測し得る撰者について述べてきた。まだまだ有節瑞保、集雲守藤、有雅元麿等も「百僚」の撰者の中に入れて、彼等の詩作活動を見てみたいのだが、注に略述するにとどめ、筆を先に進める。

(四) 書写

六十四巻という膨大な五山詩は、多くの文学僧によって書写された。即ち巻順に列挙すると、

利峰東鋭 英岳景洪 洞叔寿仙 舜岳玄光 九巖中達 鳳林承章
越溪礼格 俊甫光勝 如天瑞玄 最岳元良 剛外令柔 棠陰玄召
雲裔聖興 雄峰永俊 惟高妙安 三英慧宥 仁英承復 覺雲宗吉
文明桂学 玄室周圭 孝叔周廉 隆岳周紹 (天龍寺)玄慎 (建仁

寺常光院)紹致 (同上)紹佶 五溪宋倫 雪岑梵釜 周坦 玄英寿
洪

という有名無名の僧の手により書写されたのである。この謄写僧の顔ぶれから『五鳳集』の特色を探ってみようと調査してみたが、はかばかしい結果は得られなかった。主な識語をあげてみる。

A (第四巻々々末)

欽奉綸命書写此一冊、奉備献覽。豈非一世衰栄也。

前南禅英岳叟景洪拜上判

B (第七巻々々末)

欽承綸命謄写翰林五鳳七之巻。字々恐有烏焉之誤、攸希他後具眼者涉黄筆董舛

龜嶺玄光拜上判

C (第十八巻々々末)

謹奉勅命、謄此一冊子。惶恐而不知所以下筆、汗出浹背而已。

龍輯壬戌元和第八抄冬中流

前建長最岳叟元良拜上

D (第十九卷々末)

辱奉綸命、摩沙老眼、令謄古来五岳諸彦詩選、二冊子、攸愧字々野書
濫真矣。

元和第八龍集壬戌蜡月中流

惠嶠比丘剛外客令柔謹書判

E (第二十七卷々末)

拜投雲沢仁和尚丈室况側 惟高

F (第五十一卷々末)

龜山玄慎書之 五言詩百十首略之

これらの識語により明らかなことは、

○撰者が撰進した作品を、後水尾天皇の綸命によって書写した事

(ABC)

○勅命を受けた仁如集堯は、書写作业を弟子に恰も下請けの如く課
している。これは五山文学僧の『五鳳集』に対する姿勢が、必ず
しも「豈に一世の衰栄に非ずや」というような、言葉通りでない
事を示す(E)。

○書写は大体元和八年十二月中旬に終わっている(CD)、撰進
は同年秋までになされたと考えられる。

という点である。ここで不可解なのはFである。第五十一巻は、第

四十九・五十巻と共に「扇面部」で、収載作品数は、

四十九巻〓七言絶句二五〇首

五十巻〓七言絶句二六〇首

五十一巻〓七言絶句一〇七首 五言絶句一首

となっており、他の二巻に比して半分以下である。識語にあるよう
に、五言詩百十首を省略したからであろう。五言絶句一首というの
は、横川景三作「唐扇。以絹裁之。有梅花」という梅花を描く扇面
詩であるが、これ以外の五言詩百十首を、誰が、なぜ、省略したか
が分らない。書写担当の玄慎が省略の権限を有していたとは考えら
れず、天皇か撰者か、それとも版本の刊行者か、全く不明であり、
その意図も推測しかねる。五十四巻の本朝名区部には、「扇面水底
富士」と題する五言絶句がまじっているが、作品数は寥寥たるもの
であり、省略した百十首が他の巻に移されたり紛れこんだりしたと
は考えられない。Eの識語と同様に、『五鳳集』が当時の五山文学
僧に全面的に支持尊重されていなかった事を示している。

(五) 構成及び作者

以心崇伝の序に、

分部者二十有七、配芬陀之品則皆名方便、而無不述以偈頌。為卷
者六十有四、象易卦之数則至其奥義者、無不解以詩詞。

とあるように、『五鳳集』は法華経二十七品に倣って二十七部に分
類し、易の六十四卦に則って六十四巻で構成されている。二十八部

とは、

春部¹ 試筆部² (以下、部を省略) 夏³ 秋⁴ 冬⁵ 招寄⁶ 送行⁷ 悼⁸ 井和
 付哀傷⁹ 雜乾坤門¹⁰ 雜人倫¹¹ 雜氣形門¹² 雜生植¹³ 雜食器¹⁴ 雜人倫
 15 画図¹⁶ 扇面¹⁷ 八景¹⁸ 本朝名区¹⁹ 本朝人名²⁰ 道号²¹ 釈教²² 支那人名
 23 恋²⁴ 錯雜²⁵ 旅泊²⁶ 感懷²⁷ 祝讚

であるが、各部の内容を精査してみると、排列に意を尽したとは考えられず、さらに6招寄以降の順序は雑然としていて、部立ての文学的構成美は認められない。9-14の部名には雑の字さえ冠している。

雄 『五鳳集』二十七部は、『古今和歌集』⁽³⁾ 以来の勅撰集や、義堂周信⁽⁴⁾ の『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』(『貞和集』と略称) 天隱龍沢の『錦⁽⁵⁾ 繡段』の部立を折衷したものと考えられる。即ち『古今集』の、
 木 春(1) 夏(3) 秋(4) 冬(5) 賀歌(27) 羈旅歌(25)
 蔭 恋(23) 哀傷歌(8) 雜歌(24)

などの部名が同じである×印は内容が酷似の部名。数字は、『五鳳集』の部名の番号。仏教者である五山禅僧の『五鳳集』なのに、21釈教部を立てているのがわざとらしいが、これは『千載和歌集』以後の歌集の影響であろう。また『五鳳集』の部立は『貞和集』の、
 節序(1 2 3 4 5) 道号(20) 送行(7) 行旅(25) 器用(13 14) 画図(15) 草木(12) 哀悼(8) 雜類(24)

『錦繡段』の、

送別(7) 行旅(25) 器用(13 14) 閨情(23) 哀傷(8) 草
 木(12) 画図(15) 雜賦(24)

の分類法をも倣っていて、最終的には『古今集』などの和歌集部立により近い。それを象徴するのが23恋部であろう。

『五鳳集』の恋部は二巻あり、第六十二巻は三益永因の『三益艶詞』(『続群書類従』所収) から殆んど採られ、巻末にただ一首、絶海中津の「長門怨」を申し訳け程度に載せている。第六十三巻には横川景三の作品が百二十三首と最も多く、それには正月四日から二月二十八日までの日付がついている。思うに季節行事に合わせて恋詩の参考作品にしたかったのであろう。横川に次で英甫永雄の三十首が多く、そのあと月舟寿桂や春沢永恩ら十三人の作品が一首乃至三首載っていて、「閑居恋和歌題」とか「思不言恋」など、和臭紛々たる作品で埋められている。

さて、いよいよ『五鳳集』の内容について述べなければならぬ順序となったが、何を手がかりにしてこの勅撰詩集の特色を探ろうかと迷ってしまった。まず常識的に五山文学僧の収載作品数から見ていくことにする。大日本仏教全書の『五鳳集』は誤字誤植の多い悪本であるが、数え易いのでこの本に拠ることにする。二百四人の作者を収載数の多い順に二十人並べてみたのが、次表である。なお参考の為、成立年次の近い『中華若木集』、『花上集』、『百人一首』の収載数を併記する(『百人一首』は勿論一首ずつである)。

『翰林五鳳集』について

	文学僧	五鳳集	中華若木集	花上集	百人一首
1 月舟寿桂		1130	2		
2 天隠龍沢		1124		20	1
3 策彦周良		892			
4 希世靈彦		882	23	20	1
5 琴叔景趣		705			
6 瑞岩龍惺		696		20	1
7 江西龍派		694	10	20	1
8 瑞溪周鳳		660	1	20	1
9 景徐周麟		658			
10 蘭坡景蒞		556	1	20	1
11 南江完沅		550			
12 仁如集堯		519	9	20	1
13 西胤俊承		506	2		
14 虎関師鍊		495			
15 横川景三		495	7		1
16 春沢永恩		471			
17 英甫永雄		467			
18 駟雪鷹瀨		419			
19 雪嶺永瑾		409			
20 熙春龍喜		391			1

以上に続いて21彦龍周興、22九鼎竺重、23万里集九、24惟高妙安、25三益永因らがある。膨大な数なので、筆者の多少の教えまちがいはあるだろうが、右表によって『五鳳集』の特色はほぼ窺い知ることが出来る。

① 五山文学第四期の作品が多い。

筆者は以前に『五山詩史の研究』で、五山文学史を四期に区分して考察したことがあり、今もその考えに変わりはない。前掲表の『五鳳集』の作者をこの四期にあてはめてみる。もちろん、この期間に生没した五山僧という分類でなく、文学活動が盛んであった時期によつてあてはめた。例えば、希世靈彦や横川景三は応仁以前にも詩作しているが、乱中乱後の方が文学活動が盛んなので第四期の作者とした。

第一期 弘安二年～元徳二年（興隆期）なし

第二期 元弘元年～至徳三年（最盛期） 虎関師鍊

第三期 嘉慶元年～応仁元年（爛熟期） 西胤俊承 江西龍派

瑞溪周鳳 南江宗沅

右以外の十五人は、すべて第四期即ち応仁二年から元和元年までの衰頽期の文学僧である。従つて第四期の次のような特色が『五鳳集』にも当てはまる。

① 現実直視、自己観照の作品が少ない。

② 第三期にも見られた艶詩が益々盛んとなり、紊乱の状を呈するに至る。

③和臭が甚だしい。

④文学活動が都から地方に伝播する。

これらの特色は、『五鳳集』撰者連の主體的詩観からのみ生じたのではなく、多数の作品から自ら形成された時代性なのである。

〈2〉詩作の参考書的性格

千首を越える作品を載せる2天隠龍沢と1月舟寿桂の詩風は、そのまま『五鳳集』の性格をリードする。

天隠龍沢は主に7江西龍派に詩を学んだ。江西龍派は中唐より元末までの作品を撰んで『新撰集』を編み、天隠はその『新撰集』と5瑞岩龍惺編『新編集』の二集より精撰して『錦繡段』を編纂したのである。それは月舟寿桂が、

木 錦繡段廻黙雲師（『天隠龍沢』為童蒙所輯（題錦繡段口義後））

英 と述べているように、年少者の詩作の参考書として作られたものであった。⁽⁹⁾

月舟寿桂は本師の正中祥瑞の勧めによって天隠和尚を受戒師とし、詩文や蒲室四六法を学んだ。月舟は「前住南禅天隠和尚」に、臨予（月舟）薙髮時招禅師（『天隠』、執薙刀授之授戒師。盖俾予伝文章印也。然後予親炙者久矣。

と述べている。月舟は師の天隠和尚と同様、三条西実隆と雅交を結び、『幻雲詩稿』を残すが、ここで特筆したいのは、『錦繡段』を増補して『統錦繡段』を作っている事である。

新編集（6瑞岩）

新撰集（7江西）

錦繡段（2天隠）—統錦繡段（1月舟）

の撰集の時代的潮流と、編纂者名によって、『五鳳集』の性格が見えてきはしないか。『五鳳集』は後陽成上皇、後水尾天皇の聖旨⁽¹⁰⁾に沿いつつも、やはり童蒙の詩作に資するという意図で編まれたようである。

この事は先の部立を見ても明白である。二十七部を見なおしてみると、8悼^村和^村哀傷が目につく。さらに細部に目を及ぼすと、例えば巻二十四―巻三十一の6招寄は、分韵部と和韵部とに分かれ、巻二十六は東韵・冬韵・鍾韵・江韵・支韵、巻二十七には微・魚・齊・佳・灰韵というように、あたかも韵書の如き観を呈する。『五鳳集』学習者は、自分の詠みたいテーマが何部に属するかをまず見定め、分韵によって詩語を採取し、推敲してゆけばまずは無難な詩を作ることが出来る。

収載数最多の月舟寿桂と二番の天隠龍沢を述べておきながら、三番の策彦周良⁽¹¹⁾に言及しないのは片手落ちのようなので、少しだけ付け記しておこう。

集雲守藤⁽¹²⁾が製した「仙洞三千句序」は本論集第四巻で紹介したが、必要部分を書下し文で再録しておく。

或る時、（後陽成院は）百僚を諭して曰く、「曾^{むかし}時、横川・桃源二甘露の江東三千句有り。中間に策彦・江心両著宿の四千五百韻有りて、世を挙げて之を詠じ之を筆し、共に無窮に伝う。寔に偉な

る哉。今を越えたり」と。上皇余光を望み、将に頹風を救わんとし、五岳の俊衲と九城の寵臣を鳳闕に於て選試し、各々志を言わしむる者、東韻より威韻に到るまで三千句なり

後陽成院は策彦周良と江心承董の城西聯句をこよなく尊重されたのである。『五鳳集』には江心の作は百四十二首あり、第二十七番目に多い。なお、策彦周良自筆の『小略韻』を、上皇は慈照院の有節瑞保(13)から御借用になつてゐる事も付け加えておく。

次々と付記すれば際限がないが、収載数第四番の希世靈彦(別称は村庵)は7江西龍派の教えを直接受け、

村庵没後、禅林詩衰。

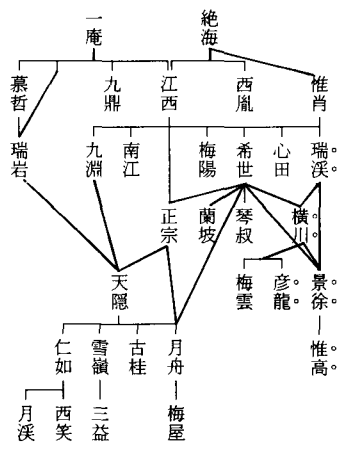
と林鶯峰が記したほど、五山文学史に最後の光芒を放った文学僧で、彼の『村庵稿』を無視しては、『五鳳集』撰者達の抱く五山文学史観が成立しなかつたのであろう。

〈3〉建仁寺友社の作品に偏つてゐる

玉村竹二氏は五山文学を、相国寺友社、建仁寺友社、東福寺系の三つに分類しておられる。⁽¹⁴⁾まず妥当な説であろう。いつ頃から言われたのか不明だが、「東福寺の伽藍づら、妙心寺の算盤づら、大徳寺の茶人づら、相国寺の梵唄づら」と並べて、「建仁寺の学問づら」という言葉がある。それほどに建仁寺は伝統的に学問・文学が盛んであった。

建仁寺友社は一庵一麟系と絶海中津系とに分れるのだが、文学の師弟関係(必ずしも法系とは一致しない)を次に図示しておく。傍点

の相国寺友社系の人がまじつていて、整然とはしないが、『五鳳集』の一つの傾向を見る事が出来る。

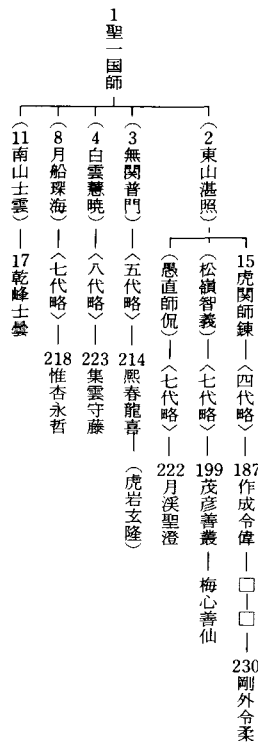


法系から言えば、建仁寺友社の祖とも言い得る絶海中津も、相国寺友社の義堂周信も、共に夢窓疎石の法嗣であるが、文学の師弟関係は別である。しかし、雪嶺永瑾、春沢永恩、三益永因、英甫永雄らは同じく此山派(15)で学系も同じくし、江西龍派、慕哲龍攀、瑞岩龍惺、九淵龍。際正宗龍。統らは法系も学問文学も、さらに血縁まで系統を同じくする珍らしい例である。天隱龍。沢は系字(法諱の第一字)を同じくするもの(法系は一山派で、たゞ学問を正宗龍。統、九淵龍。際、瑞岩龍。惺より学んでゐるのである)。

〈4〉東福寺住持が多い

14虎関師鍊の四百九十五首、20熙春龍喜の三百九十一首しか前記の二十人の中に入っていないが、茂彦善叢(一二五首)、月溪聖澄(16)

(一一五首) 集雲守藤(六四首) 作成令偉(四七首) 梅心善仙(二九首) 剛外令柔(二四首) 惟杏永哲(一六首) 乾峰士曇(一首) がある。虎関、乾峰、茂彦以外は全て剛外令柔跋文にいう「今人」であり、又、梅心善仙以外は皆東福寺に入院した僧である。法系を示しておく(カッコ内は『五鳳集』に無関係の人。数字は東福寺住持世代)。



藤 思うに、跋文を書いた剛外令柔や、集雲守藤が『五鳳集』撰者であったので、文学的価値はそう高くないのに、東福寺住持の作品を入集したのであろう。

一朝、百僚をして古来五岳諸彦の、虎関、乾峰、空華、蕉堅、惟肖、村庵、江西、瑞岩以下、今人に洎ぶ詩を輯録せしむ。という剛外の跋文に拘らず、乾峰の作品が僅か一首というのが暗示的である。

関白豊臣秀次は、衰えた五山文学を再興する為、東福寺南昌院で月次詩聯会を開くことを命じた。南昌院は天正十七年に豊臣秀次が虎岩玄隆(前掲法系図参照)を開山として創建した塔頭である。は

じめ法雲院と称していたが後に南昌院と改め、開山の虎岩玄隆は文禄四年七月十五日、高野山金剛峯寺で豊臣秀次に殉死し、死後に東福寺住持位に列せられている。南昌院での月次詩聯会の作品は、『五鳳集』に多く収載された。例えば、

卷二 「春夜歩月」 於南昌院
 卷三 「黃鸝語太平」 文禄二己正月廿五日秀次公始五岳詩聯句 於南昌院

卷十四 「月夜聴鶉」 五月廿五日於南昌院

などは、明らかに南昌院での作品である。又、『五鳳集』に南昌院の三字は記録されていなくても、『鹿苑日録』の記述と照合すると、卷五「簷花細雨」、卷十八「蟋蟀蒺秋吟」、卷二十「菊花逢兩重陽」「砧声報秋」、卷三十「蓬萊会」、卷三十九「鳳凰集京師」

も、月溪聖澄、集雲守藤、惟杏永哲、剛外令柔などの東福寺僧を主要メンバーとした、南昌院月次詩会の作品である。それも、詩会での秀作を厳選したものではなく、網羅的に全作品を収めていて、『五鳳集』が五山文学衰頽期の類聚詩集としてふさわしい?ものになっている。

むすび

以上、五山文学唯一の勅撰詩集でありながら、『五鳳集』が甚だ杜撰な編集方針、低い文学鑑賞眼によって作られた作詩参考書である事を明らかにした。本来ならば代表的作品を取り上げ、その精密

な解釈学的研究の上に立って、(六)『翰林五鳳集』の詩風とその特色」と項をあらためて論じなければならないのだが、筆者はもう退屈した。近世漢文学史、五山文学史の研究の為、『五鳳集』をざっと概観してきたが、文学的感興を惹起するものは少ない。学問研究に主観は禁物なのだが、「研究の為の研究心」を失なった筆者は、研究意欲をそそるテーマに、書生々活の残年を燃焼したのである。

注

- (1) 漢訳の妙法蓮華経は二十八品であるが、正法華経などは見宝塔品と提婆達多品とを一にまとめているので二十七品である。
- (2) 卷四十五―卷四十八は画図部、卷四十九―卷五十一は扇面部であるが、春部に「子昂春山図」、「扇面桜花」、夏部に「榴花禽図」、「扇面杜若」など、各部にわたって画図、扇面の作品があり、その他不整美が目立つ。
- (3) 『五鳳集』序に、「此集之発端、江春入旧年之旧題、偶合古今集巻頭之詠歌」とある。
- (4) 『五鳳集』跋に、「自虎関、乾峰、空華（義堂）、蕉堅、惟肖、村庵、江西、瑞岩以下、泊今人之詩」とある。
- (5) 『五鳳集』跋に、「中古有新撰・新編二集行于世。默、雲師（天隠）拔其萃、称錦繡段也」とある。
- (6) 伊藤東慎「三益永因の艶詩」（『禅文化』四十六号）参照。
- (7) 拙稿「倒桐集の世界」（『禅文化研究所紀要』十一号）参照。

(8) 拙著『五山詩史の研究』第四章参照。

(9) 舟橋秀賢の『慶長日件録』（慶長九・四・八の項）に、「禁中南禅寺語心院沖長老錦繡段談義被申上於黒戸」とあり、『言緒卿記』（慶長十七・四・十九の項）には、「従近衛殿慈照院（有節瑞保）錦繡段談申候」と記され、当時の公家でもよく読まれていた。

(10) 歌集・詩集を勅撰する事により、聖代を誇示謳歌するという伝統的公式的な観慮の外に、後陽成院は、『錦繡段』『勸学文』『日本書紀神代卷』『大学』『論語』など、いわゆる慶長勅版を刊行された延長線上に、『五鳳集』刊行を企図なされたと推測し得る。又、後水尾天皇は、朝廷と徳川幕府との確執の中で、朝廷の権威を文学に求めたとも考えられる。

(11) 牧田諦亮『策彦入明記の研究』参照。

(12) 集雲守藤は近江の人で、東福寺不二庵の桂庵守広の嗣である。南昌院詩聯会の常連であったが、天正十九年八月五日に真如寺の台帖を受け、慶長二年三月十一日、太閤豊臣秀吉から東福寺公帖を受け、時に三十九歳であった。しかしどうしたことか江湖疏、道旧疏、同門疏なしで入院し、半年足らずで退いた。慶長九年には南禅寺公帖を受く。後陽成院御所、八条院邸、近衛信尋邸の詩歌会に度々赴き、九条忠栄邸で三体詩を講じ、五山衆が騰写した『東鑑』に跋文を書くなど、活発に文学活動を行なった。方広寺鐘銘事件の文英清韓を弁護したが成功せず、元和七年七月六日、六十三歳で示寂した。『棘林志』所収の「靈雲院集雲守藤和尚伝」に、「後陽成帝每好文雅、及遷仙宮、屢召師為詩聯会。叙遇殊渥、每賜御書」とあり、後陽成院の御信任が厚かった。又、黒田如水とも師壇の好を結ぶ。『五鳳集』には六十四首入集。

(13) 有節瑞保は近江の市村氏出身で、桃源瑞仙と同族である。祐谷瑞

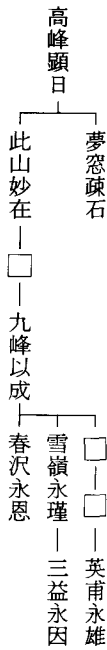
延の法を嗣ぎ、天正九年正月、真如寺に出世し、次で同十三年二月に相国寺、同二十年四月に南禅寺に入院した。「在中中淹遷化の日、慈照院殿（足利義政）の御命日に死ぬたろう」という予言通り、寛永十年十一月七日、八十六歳で慈照院で示寂した。法嗣に听叔頭暉や、『五鳳集』を書写した如天瑞玄がいる。「相国塔頭末派略記」の慈照院の項に、

曾司僧事、居于鹿苑院、山門再造慶讃、後陽成院御宇、召師及五岳諸老、令製詩聯句。有御製使師評之、有時賜白銀若干。

とあるように、慶長十七年十一月まで鹿苑僧録となり、いわゆる鳳城聯句会の常連で、聚楽城で昌叱の源氏物語講を聞くなど、当代の代表的文学僧であった。『五鳳集』には二十七首載る。

(14) 玉村竹二『五山文学』二百十四頁以下。

(15) 法系は次の通りである。



(16) 月溪聖澄は近江の人。器之聖琳の法を嗣ぎ、法嗣には、『五鳳集』を書写した雲裔聖興がいる。仁如集堯（四六文で有名な『鏤水集』の著者）の教えを受けること二十余年に及び、特に四六文に秀れている。笑隠大訥（号は蒲室）の蒲室疏法を慶長十七年に講じている。『鹿苑日録』〈慶長二、十一、八〉に、他人が製した諸山疏を見て、「八字の称は祖語に非ず」と批判すると、西笑承兌は「月溪一生之癖、欲指人疵瑕」と書きとめている。酷しい性格の人であったらしい。文禄三年十月、伊達政宗に聘せられて仙台の東昌寺を兼務したが、慶長元年十二月十日東福寺住持となり、同九年五月十五日南禅寺公帖を受け、元和元年七月七日、八十歳で遷化した。「這老凍儂

本無遺迹 面目現前 四双八隻」が遺偈である。鳳城聯句会の常連であったが、詩の創作よりも学問に秀れ、九条忠栄邸（慶長十四、十、十）同十六、十、廿三）や禁中（慶長十七、八、十）同十八、十、十三）で『古文真宝』を講じた。听叔頭暉は、「賀月溪老師為帝師範、在輦下迁居」〈『鹿苑日録』慶長十八、八、十七〉と記している。

(17) 東福寺即宗院所蔵「前任東福虎岩和尚肖像」に拠る。